第 3 章　遺物

第 1 節　1 号墓出土遺物

1. 中国青磁

中国青磁皿 1 点 (第 39 図 1)、碗 1 点 (第 39 図 2) が確認された。皿は口径 12.4cm、器高 2.9cm、高台径 5.6cm を測り、口縁は輪花状を呈する。完形の状態で出土した。釉は緑灰色で、高台内のみ露胎である。内底見込に文字または記号が表されている。碗は口径 14.6cm、器高 6.6cm、高台径 5.0cm を測る外反碗である。内底には圏線が巡り、中央部はやや膨らみをもつ。釉は緑灰色で高台内まで全面施釉である。

2. タイ青磁

すべて破片の状態で出土したが、盤 1 点 (第 39 図 3)、鉢 1 点 (第 39 図 4) の 2 個体に復元された。盤は口径 26.0cm、器高 7.6cm、高台径 9.6cm を測る。鍔縁口縁をもち、内底には圏線が巡る。体部内面には蓮弁文と圏線が施され、外面は無文である。釉はオリーブグリーン色で、高台のみ露胎である。また高台内部には径 5.5cm の筒型敷柱跡が残る。鉢は口径 21.3cm、器高 9.9cm、高台径 9.0cm を測る。内外面とも口縁部下に二重の圏線がめぐる。釉色は灰緑色で外面体部下端まで施釉される。高台内には径 4.3cm の筒型敷柱跡が残る。これらの特徴からタイのシーサッチャナライ青磁に比定可能である。

3. 土師質丸底甕

頭側からの 2 点はほぼ完形の状態で、足側からの 1 点は口縁が欠損した状態で出土している。頭側 2 点のうち、東側の丸底甕 (第 39 図 5) は残存高 18.5cm、胴部中央付近の最大径 22.4cm を測る。外面肩部付近に 2 条の鋸歯状文が巡っている。外面は横方向に丁寧なナデ、タタキ痕、内面には成型時の手指痕が残る。西側検出の丸底甕 (第 39 図 6) は口径 14.6cm、器高 19.2cm、胴部中央最大径は 21.7cm である。外面には横ナデ、内面には手指痕が残るが、剥離が激しく不明瞭である。足側から検出された丸底甕 (第 39 図 7) は頭側のものに比べてやや大ぶりな作りで、残存高は 19.3cm、胴部中央最大径 26.6cm を測る。外面には不定方向のナデ、内面には小さなあて具痕が残る。底部には径 1cm ほどの焼成前穿孔が見受けられる。

第 35 図　1 号墓出土遺物

第 36 図　1 号墓出土遺物

1. 中国青磁碗、2. タイ青磁碗 3. タイ青磁盤、
4. 土師質丸底甕、5. 土師質丸底甕、6. 土師質丸底甕
7. 中国青磁皿

4. 青銅製耳飾

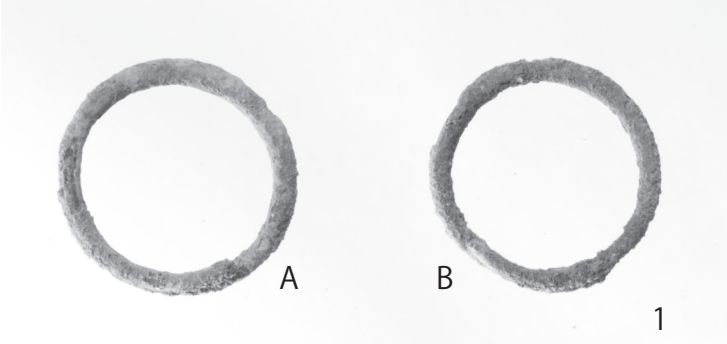
A は外径 3.4cm、内径 2.7cm、太さ 0.4cm、B は外径 3.3cm、内径 2.6cm、太さ 0.3cm を測る。いずれも棒状品を丸めて円形に成形したものと思われるが、錆化のため接合部等の観察はできていない。蛍光X線分析で銅を主成分とし、これに亜鉛を混ぜる合金であることがわかった。

5. ガラス小玉

頭部周辺から散乱した状態で合計 118 点が出土した。小玉は青色 (水色)、白色、青色と白色が交互に混ざるタイプの 3 種類が確認された。点数の分布をみると、青色 106 点、白色 11 点、青・白色混在タイプ 1 点と、圧倒的に青色小玉の量が多い。ほぼ全個体にらせん状の巻き付け痕跡が見受けられた。平均的にみて、どの種類も直径 4㎜から 6㎜の範囲におさまる。これらのガラス製小玉はカリ鉛ガラス製で、宋代以降の中国での検出事例が多いタイプであるということが判明している (第 3 部第 3 章参照)。

6. 鉄製小刀

木棺痕跡の外側から東西にそれぞれ 1 点ずつ出土している。西側から検出された小刀は全長 25.1㎝を測る。現在でも現地で使用している草刈り刀と似た形状をしているがやや小ぶりである。東側から検出された小刀は全長 12.8㎝を測る。刀身は「く」の字に屈曲しており、陶磁器が破砕されていることを考え合わせると、副葬に当たって人為的に曲げた可能性も考えられる。いずれも細い茎を有し、身と茎の間には筒状の口金物がはめられ、木製柄と茎を締め付けていたものと考えられる。



第 37 図　1 号墓出土遺物
1. 青銅製耳飾
2. ガラス小玉
3. 鉄製小刀 1
4. 鉄製小刀 2

第 2 節　2 号墓出土遺物

1. 中国青花碗

2 号墓東寄りから金属製碗に被さるように出土した。遺物の配置状況から頭部にあたるものと推定される。口径 17.6cm、器高 7.6cm、高台径 7.1cm を測る腰張碗である。外面体部には唐草文様、内面体部には瓔珞文、内底見込には十字花文が施されている。フィリピンのサンタ・クルス沖沈没船 (1510 年) 資料などの中に類例が認められることから、15 世紀後葉から 16 世紀前葉にかけての製品であると考えられる。

2. 青銅製碗

口径 12.9cm、底径 8.3cm、高さ 7.5cm。口縁端部は丸く肥厚するが体部を含め厚さは 0.2 から 0.3mm。比較的錆は少なく全体に黒色を呈す。保存状態の良い内底見込部は黄褐色を呈する。底部見込を除き内外面にロクロ目が残る。蛍光Ｘ線分析の結果、銅を主成分とし、これに錫と鉛が加わる青銅製品であることがわかった。

3. 青銅製指輪

外径 2.1cm、内径 1.7cm、腕輪と同様、棒状品を曲げて円形とする。単純な棒状ではなく、外側に 14 個の波形を有する。蛍光Ｘ線分析の結果、腕輪と似たような結果で、銅を主成分とし、亜鉛と錫を含む合金であることがわかった。

4. 青銅製腕輪

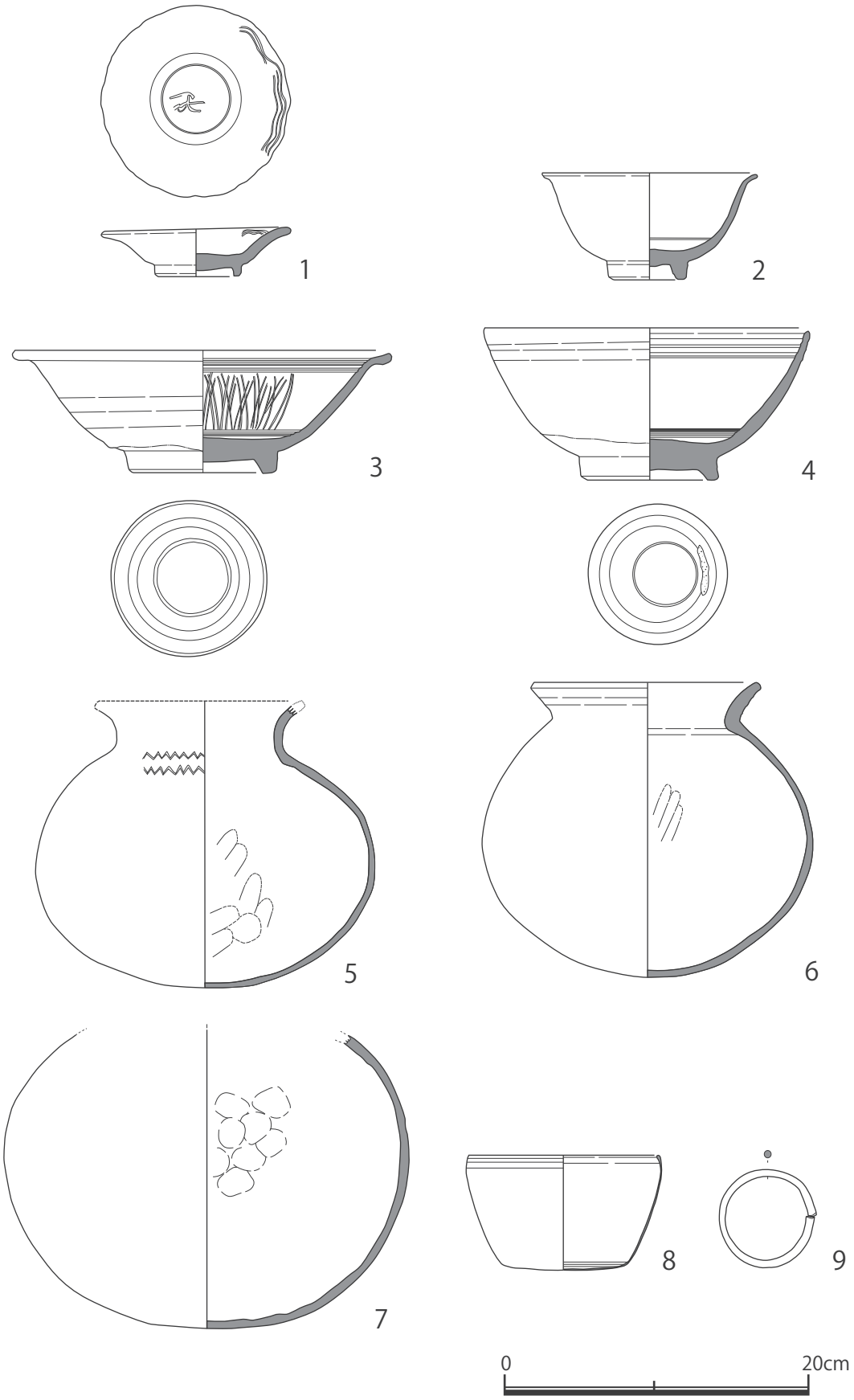
外径 6.4cm、内径 5.4cm、太さ 5mm。断面円形の青銅棒状品を曲げて製作したと見られ、端部の合わせ目はややずれる。成分は指輪と同様。

第 38 図　2 号墓出土遺物

1. 青銅製碗、2. 中国青花碗

3. 青銅製腕輪

4. 青銅製指輪



第 39 図　1 号墓、2 号墓出土遺物実測図

1 号墓出土遺物：1. 中国青磁皿、2. 中国青磁碗、3. タイ青磁盤、4. タイ青磁碗、
5. 土師質丸底甕、6. 土師質丸底甕、7. 土師質丸底甕

2 号墓出土遺物：8. 青銅製碗、9. 青銅製腕輪

第 3 節　学校地区 C トレンチ出土遺物

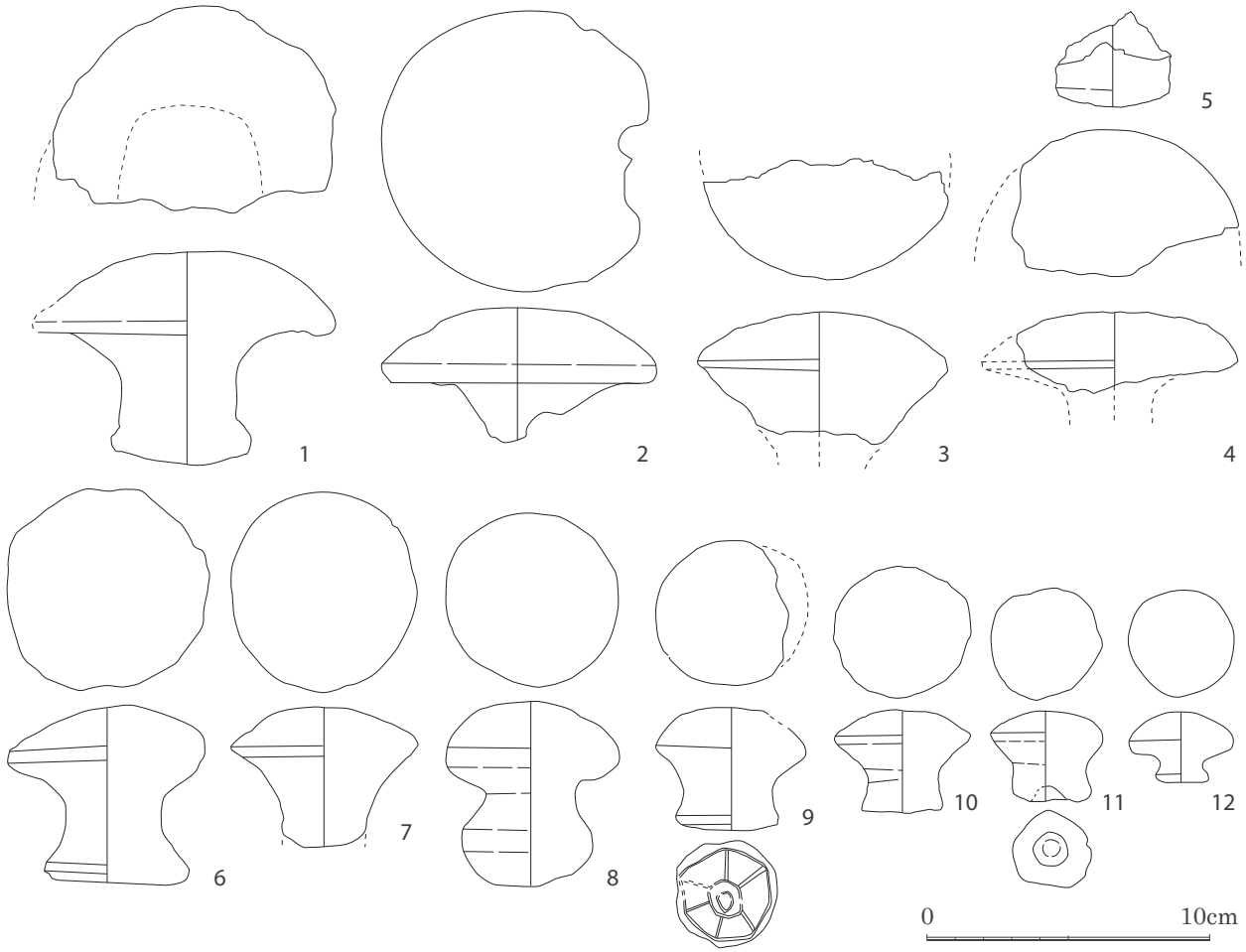
1. 当て具

学校地点では茸形をした当て具が出土した。これらは土師質土器の丸底甕を製作するときに、内面の当て具として使用したと考えられ、破片数にして 25 点出土した。笠部の大きさによって大中小の 3 種に分類できる。

大形（第 40 図 1 ～ 4)　1 は笠部径 10.5cm を測り、最も大形である。笠部の中央が使用により摩滅するとともに、柄部の端面も摩滅する。2 は笠部径 9.7cm。3 は笠部径 9.4cm。4 は笠部径 9cm。5 は大形の柄端部の破片と考えられ、1 と同様柄部端面が使用により摩滅する。

中形（第 40 図 6 ～ 9）笠部の大きさは 6.8cm から 5.1cm まで。大形と形態は似るが、柄部端面が平坦になる点が特徴である。ただ 8 については柄部端面も丸くなり、この部分を当て具として使用している可能性がある。また 9 は柄部端面に刻文を有する。

小形 (第 40 図 11,12) は 2 点図示した。笠部径は 6 が 3.6cm、7 が 3.5cm である。6 は柄部端面にくぼみを持つ。これら小形品は笠部に使用痕が観察できず、その大きさも非実用的で、実際の当て具として使われたかは疑問がある。



第 40 図　当て具

2. 腕輪

学校地区の各トレンチから陶製と石製の腕輪が多く出土した。いずれも円形で、多くは陶製であるが、砂岩製の腕輪が 4 点発見されている。直径による度数分布は下表の通りである。これを見ると直径はかなりのばらつきがあり、直径 40mm 以下のものは腕輪というより耳飾り等であった可能性が考えられる。墓葬からも青銅製の腕輪と耳飾りが発見されており、腕輪と耳飾りが当該地の主要な装飾品であったと推定できる。

直径	個体数
20mm 以下	1
21-30mm	19
31-40mm	20
41-50mm	11
51-60mm	7
61-70mm	3
71mm 以上	2

陶製腕輪

番号	大きさ				色	トレンチ	整理番号
	直径 (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)			
1	38	7	6	3	赤色	E	K284
2	38	7	5	4	灰色	F	K383
3	27	8.5	5	2	灰色	F	K395
4	23	14.5	7	4	灰色	F	K495
5	54	11	7	7	灰色	F	K585
6	30	13	5	3	灰色	F	K598
7	39	7	4	3	黒色	F	K978
8	46	10	10	9	灰色	C	K1165
9	47	9	9	6	灰色	C	K1166
10	73	8	8	12	灰色	C	K1167
11	60			6	灰色	C	K1168
12	62			8	灰色	C	K1169
13	72			7	灰色	C	K1170
14	42	8	8	4	灰色	C	K1171
15	45	5	5	3	灰色	C	K1172
16	33	7	7	3	灰色	C	K1240
17	55	9	7	9	灰色	C	K1265
18	32	9	8	4	灰色	C	K1366
19	26.5	9	8	2	灰色	C	K1367
20	32	7	10	3	灰色	C	K1368
21	30	8	8	3	灰色	C	K1370
22	35	7	6	3	灰色	C	K1383
23	26	9	8	3	灰色	C	K1446
24	50	7	7	6	灰色	E	K1564
25	54	8	8	4	灰色	E	K1565
26	21	8	8	2	灰色	D	K1599
27	33	8	8	4	赤色	D	K1668
28	36	13	13	5	灰色	D	K1690
29	36	12	12	5	灰色	2	K1845
30	50.5	12.5	12.5	8	灰色	D	K1962
31	40	6	6	3	灰色	C	K1963
32	42.5	9	8	4	灰色	C	K1964
33	32	6	8	3	灰色	C	K1965
34	32	6	6	2	灰色	C	K1966
35	36	8	8	4	灰色	C	K1967
36	62			7	灰色	F	K1970
37	49	9	8	6	灰色	F	K1971
38	30	7	8	3	灰色	F	K1972
39	39	5	6	3	赤色	F	K1973
40	29	6	8	3	赤色	F	K1974
41	26	6	6	2	灰色	G	K1979
42	36	10	6	3	赤色	G	K1981
43	23	11	5	3	黄灰色	G	K1984
44	38	9	9	4	灰色	G	K1985
45	40	7	5	3	赤色	G	K1986
46	25	8	5	2	灰色	G	K1987
47	26	7	7	2	灰色	G	K1988
48	38	15	8	6	赤色	G	K1990
49	19	8	4	1	灰色	G	K1991
50	42	8	4	4	灰色	G	K1992
51	41	9	6	4	灰色	G	K1994
52	22	7	5	2	灰色	G	K1996
53	30	5	7	3	灰色	G	K1997
54	24	8	5	2	灰色	G	K1998
55	24	8	7	3	灰色	G	K1999
56	30	8	8	4	灰色	G	K2000
57	45	8	8.5	6	灰色	G	K2001
58	22	5	7.5	2	灰色	G	K2002
59	51	8	9	6	灰色	H	K2004

石製腕輪

1	56	5	5	6	赤色	G	K1980
2	31	7	4	3	灰色	G	K1989
3	51	8	5	6	灰色	G	K1993
4	41	5	3.5	2	灰色	G	K2003

第 41 図　陶製・石製腕輪

第４節　第４・６・７地区表面採集遺物

表面採集遺物は近年地中から掘り出され、地表に散乱したままの状態で放置されたと推測される。今回の調査でそれらの遺物を採集し、基礎的な整理作業をおこなった。表採遺物には墓壙出土遺物よりさらに多様な輸入陶磁器が含まれている。中国製品のみならず、タイ青磁のほかミャンマー青磁やビンディン青磁に加えて在地のクメール黒褐釉陶器も採集することができ、多様な東南アジア産陶磁器を確認している。

以下に、抽出した表採資料の詳細を記す。

1. 中国青花

村内各地点で確認しており、発見されたのはすべて碗で、主に 15 世紀後半～ 16 世紀前葉にかけての製品であると思われる。中国青花碗 1(第 42 図 1) は腰張碗で口径 13.2cm、器高 6.4cm、高台径 5.6cm を測る。内底には十字花文、内面口縁部には梵字文が表されている。外面体部には唐草文、下部には略化した蓮弁文帯が描かれている。中国青花碗 2(第 42 図 2) は腰張碗で口径 15.0cm、器高 6.4cm、高台径 6.6cm を測る。内底には松竹山水文が、内面口縁部には四方襷文が施される。外面口縁部には亀甲文帯、体部には松竹山水文が表現されている。

2. タイ青磁

中国青花と同様、村内各地点から多く発見された (第 44 図 1、2)。確認された器種は盤と碗がほとんどである。図 6:1 は鍔縁口縁を持つ青磁盤で口径 23.1cm、器高 8.2cm、高台径 9.2cm。釉色は灰緑色で外面体部下端まで施釉され、高台は露胎である。高台内には径 4.8㎝の筒型敷柱痕が残る。図 6:2 は鍔縁口縁を持つ盤で、口径 22.7㎝、器高 8.3㎝、高台系 9.8㎝を測る。内面体部には櫛描きによる連続した蓮弁文が施され、外面体部には縦筋文が表される。釉色は灰緑色で、高台のみ露胎である。高台内面には径 5.2㎝の筒形敷柱跡が確認できる。

3. タイまたはミャンマー白濁釉鉢

白濁釉製品は 1 点のみの確認で、口径 17.6cm、器高 10.0cm、高台径 8.4cm を測る鉢である (第 44 図 3)。口唇が肥厚した厚手で重量感のあるつくりである。内底には圏線が巡り、外面体部には縦筋文が施される。厚い化粧土の上から釉薬をかけ、釉は光沢のない白濁色に発色する。産地については現状ではタイまたはミャンマーとしたい。

4. ミャンマー青磁

2 点がほぼ完形に復元され、いずれも碗である (第 44 図 4、5)。図 6-4 は口径 11.7cm、器高 7.2cm、高台径 5.0cm を測る。口縁はやや内湾し、内底にはごく浅い圏線が巡る。高台が高めに作り出され、側面を一周削り取り、畳付はやや不整形な作りである。釉色は灰緑色に近く、外面体部下端まで施釉される。15 世紀から 16 世紀にトワンテ周辺で生産されていた青磁製品と共通する特徴をもつことから、生産地を当該地域に比定した。

5. ベトナム中部青磁

ベトナム中部ビンディン青磁が 3 個体が確認された (第 44 図 6、7)。図 6:6 は玉縁状の口縁をもった碗で、口径 16.3cm、器高 6.5cm、高台径 5.0cm を測る。内底には輪状釉剥ぎがなされ、内外面ともに無文である。高台側面の表面が一周削り取られており、わずかに段差がつく。釉は薄く体部下端まで施釉されているが剥離が激しい。釉色は黄灰色である。図 6:7 は口径 16.4㎝、器高 6.4㎝、高台系 5.2㎝を測る碗である。内底には幅広の輪状釉剥ぎがなされ、内外面ともに無文である。釉色はやや光沢のあるオリーブグリーン色で、外面体部中頃までの施釉である。

6. 広東系褐釉四耳壷

第 44 図 8 は、口径 9.2cm、器高 18.2cm、底径 10.4cm を測る。胴中央部付近に最大径をもち、径 19.2cm である。短頸で肩部には 4 個の耳が横位に貼付される。釉はかせているが、外面体部下半まで施されている。

7. クメール黒褐釉四耳壷

第 44 図 9 はクメール黒褐釉四耳壷の破片である。頸部に沈線が巡りその下部に形骸化した耳が横方向に据えられている。肩部には横位に沈線と波状文が施文され、以下には縦方向に波状文が施される。釉色は黒褐色で外面全面に施釉される。

8. ミャンマー土師質碗

第 44 図 10 は土師質の碗で、高台が外側にやや広がる。口径 15.2cm、器高 7.7cm、高台 8.8cm を測る。ナデ調整されたとみられ、また外面には丹塗りのような朱色が一部に残る。同様の製品がミャンマーのパヤジー窯跡で発見されたという報告がみられるため（富山佐藤記念美術館 2004）、今回はミャンマー産と比定した。

参考文献 : 富山佐藤記念美術館、『東南アジアの古陶磁 (9) －ミャンマーとその周辺－ 』、2004

第 42 図　表面採集遺物 1

1. 集合

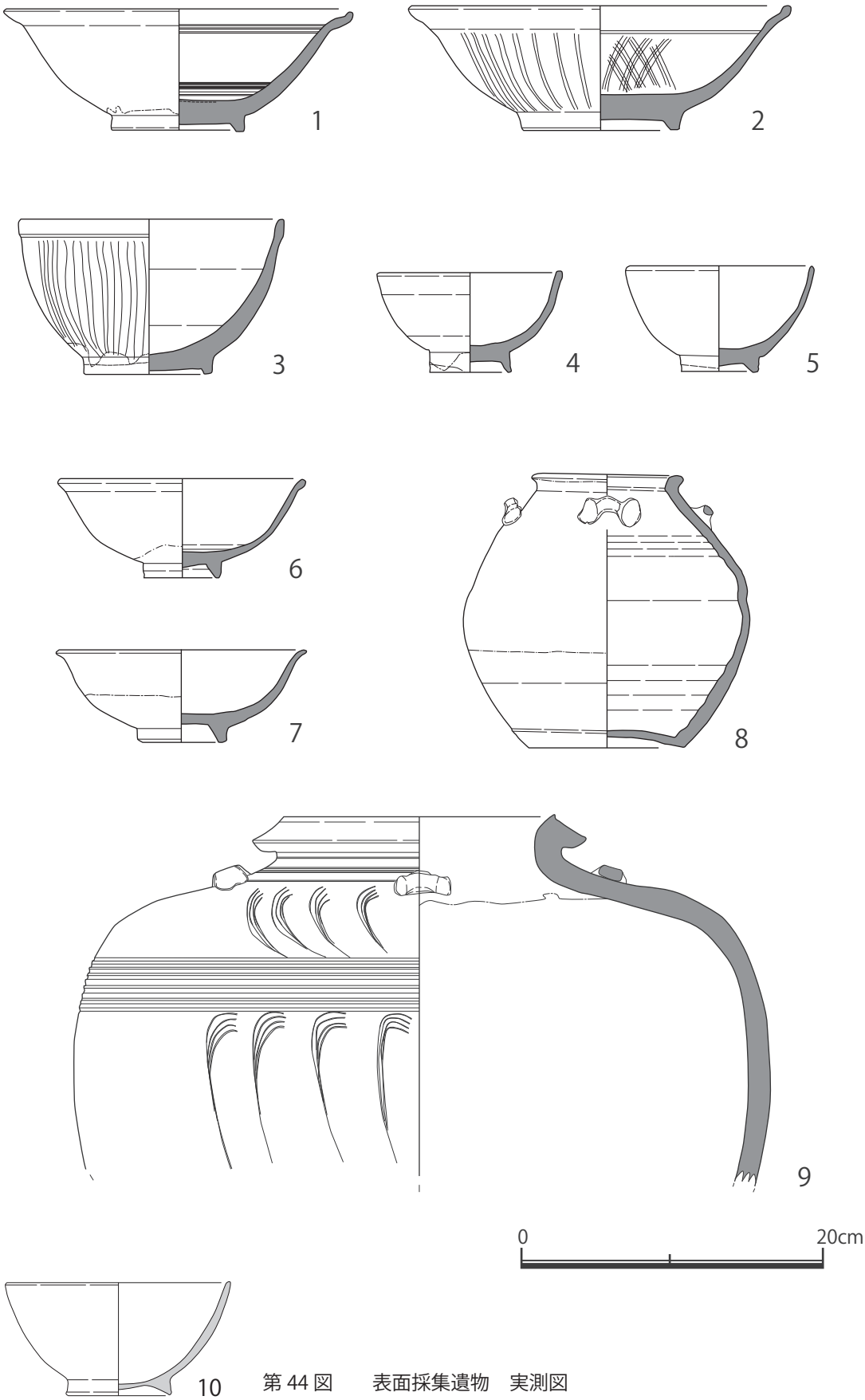
2.3. 中国青花碗

4. タイまたはミャンマー白濁釉鉢

5.6. タイ青磁碗

第 43 図　　表面採集遺物 2

1.2. ミャンマー青磁碗
3.4. ベトナム中部青磁碗
5. タイ青磁盤
6. ミャンマー土師質碗
7. クメール黒褐釉四耳壷
8. 中国産褐釉四耳壷



第 44 図　　表面採集遺物　実測図

1.2. タイ青磁盤
3. タイまたはミャンマー白濁釉鉢
4.5. ミャンマー青磁
6.7. ベトナム中部青磁碗
8. 広東系褐釉四耳壺
9. クメール黒褐釉四耳壺
10. ミャンマー土師質碗